

令和 5 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
指定校推薦

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、共同通信社の記者として、日本語と英語の二つの言語で取材し、執筆した経験を持つ宮武久佳^{みやたけひさよし}さんが、国際理解の在り方について述べたものです。宮武さんの意見を要約し、それに対するあなたの考えを600字以内で述べなさい。

よく「国際理解」という言葉が使われますが、日本では今なお「世界のことをよく理解する」「今、世界がどうなっているかを知る」という「受け身」の意味で使われることが多いように感じます。しかし、日本が本当の意味で、国際社会で活躍するには、相手のことを知る一方で、自分たちのことを理解してもらうこと、つまり発信が大切なのではないのでしょうか。コミュニケーションとは、主張や意見、情報のキャッチボールであるはずです。つまり、国際理解とは、「国と国が相互に理解し合う」ことだと思います。そのためには、言葉で発信することが重要になります。その場合の言葉とは、世界でもっとも流通している「英語」になるでしょう。しかし、日本人は英語が得意ではありません。

「英語」というときに注意が必要です。誤解してならないのは、今では英語は英国人のもの、米国人のものでなくなり、世界共通の言語という性格を持つようになったということです。

世界各地で、たとえ英語を母語とする人がいない状況でも、英語が使われます。仮に、皆さんがベトナムやタイに旅行して買い物をする場合は、現地の人と、かたことでも英語を使うのではないのでしょうか。南米やアフリカを旅行しても、普通に英語を使います。その際、英国人の英語、米国人の英語と異なっても何ら問題は起きません。

今や英語は、英米人やオーストラリア人の専有物、私有物というよりも、世界共通語の地位にあります。仮にこれを「国際英語」と呼ぶならば、国際相互理解のためには、国際英語を使うのが効率がよいと思います。

おもしろいことに、世界共通語としての「国際英語」が世界を支配しつつあるなかで、英米人の私有物の英語が世界上でうまく受け入れられていないという状況も発生しています。「世界共通語としての英語」(国際英語)が世界を覆い始め、「英米人の英語」が劣勢に立ち始めているかのようです。例えば、商社やIT企業、金融機関に勤める日本人が話す「日本式の英語」も国際社会の中で十分な存在感を発揮しています。

片や日本語をどう考えれば良いのでしょうか。海外からやって来る人のために、私たちも「分かりやすい日本語」について考えてみる必要がありそうです。外国人を見るや、すぐに英語を使いたがる人はいますが、日本で暮らす外国人にとって一番身近な言語は英語ではありません。日本語です。

また、日本人は、「わび」「さび」は外国人には分からないと決め込んでいるフシがあります。シェイクスピアやモーツァルトなど異文化の作品を愛好する日本人が、他の国の人に

「和歌や俳句、能は、あなたたちには分からないだろう」とどうして言えるのでしょうか。

現実には、日本の多くの伝統芸能は外国人の手によって維持されています。音楽や美術、染めもの、陶器など多くの芸術や工芸品の分野で、外国人がその素晴らしさを発見して、日本に根を下ろし、それぞれの分野でリードしています。今や、スポーツ競技としての相撲を世界で最もよく知っているのはモンゴル人だと言えないでしょうか。

英語が英米人やオーストラリア人の私物でないように、日本語も日本人の占有物ではありません。また、それぞれの国や地域の文化も、異文化から来た人と共有するのが今の時代の流れであるように思います。グローバル時代のリアリズムとは、そういうことだと思います。

(宮武久佳『わたしたちの英語 地球市民のコミュニケーション力』による・一部省略がある)